

2024 年度（令和 6 年度）
福山大学 FD・SD 活動報告書

福山大学大学教育センター
教育開発部門

目次

はじめに.....	1
1. 第1回 FD・SD 研修「令和5年度教育振興助成金活用教育研究報告会」報告.....	2
2. 第2回 FD・SD 研修 「第11回福山大学教育改革シンポジウム」.....	4
3. 令和6年度福山大学学部・学科・センターのFD・SD活動報告.....	11
4. 総括.....	18

はじめに

教育基本法はその第 9 条で教員の資質・能力の向上について定めている。曰く、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」「前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない。」と。学校教育法のいわゆる 1 条校たる大学の教員が、ここにいう教員に含まれないはずはない。とりわけ、大学を取り巻く内外の環境の劇的な変化の中で教員に求められる資質・能力が高度化し拡大している状況の下、それに対応しうるための研修の重要性は日増しに高まっていると言っても過言ではない。平成 25 年 5 月 28 日に教育再生実行会議はその第三次提言「これからの中等教育等の在り方について」の中で、①グローバル化に対応した教育環境づくりを進める、②社会を牽引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める、③学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する、④大学等における社会人の学び直し機能を強化する、⑤大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する、という 5 つの課題を掲げた。

これからの中等教育等に求められる資質・能力とは、これらの課題に適切に対処しうる力であろうし、そのための研修機能ないし FD（ファカルティ・ディベロップメント）の充実強化がいっそう図られねばならない。

本学では、授業内容・方法の改善、教員の資質・能力向上等、大学教育の質的な向上を目的とした組織的な取り組みとしての FD の重要性が早くから認識され、十数年前から独自の研修が続けられてきている。当初は、教務委員会および自己評価委員会を中心となって企画・運営されてきたが、平成 21 年 4 月に大学教育センターが設置されると、翌々年の平成 23 年（2011）以降は、センターの教育評価・改善部門（平成 26 年度より教育開発部門に改称）がその役割を引き継ぎ、今日に至っている。そのため、「大学教育センター規則」の第 3 条には、担当業務 10 項目のうちの第二として「教育内容・教育方法の改善に係る全学的な企画、推進、組織的な研修（FD）に関すること」が明記されている。同規定に基づき、現在、全学的な取り組みとして、大学教育センター教育開発部門が中心となって、FD 活動を実施している。また、これらの FD 活動については事務職員の参加も奨励しており、テーマによっては SD（スタッフ・デベロップメント）活動にもなっている。

令和 6 年度は、大学教育センター主催の全学 FD・SD 活動を 2 回実施した。また、本学では全学的な FD・SD に加えて、各学部・学科・研究科ごとの特色やニーズに合わせた FD・SD 活動も行っている。本報告書は、令和 6 年度に実施されたこれらの FD・SD 活動の記録をまとめたものである。

令和 7 年 3 月 31 日

大学教育センター センター長 鶴田 泰人

同副センター長 今井 航

同 教育開発部門長 佐藤 英治

同教育開発部門 生物科学科 岩本 博行、海洋生物科学科 北口 博隆

1. 第1回 FD・SD 研修「令和5年度教育振興助成金活用教育研究報告会」報告

令和6年6月19日（水）、「令和5年度教育振興助成金活用教育研究報告」をテーマとして、今年度の第1回 FD・SD 研修を大学会館3階ICT教室「CLAF」にて実施した。発表演題は10演題で、以下に示す。多くの学科・センターから、それぞれの教育における新たな取り組みについて報告があった。

日時：令和6（2024）年6月19日（水）

場所：大学会館3階ICT教室 CLAF

演題数：10演題

研修時間：発表開始後1時間

発表形式：ポスター発表、その他

参加者：教員143名（助手7名を含む）、職員2名

- 特色ある教育方法開発助成

令和5年度 教育振興助成金 一覧

1. 特色ある教育方法開発助成金

NO	研究者名 (代表者)	学科	課題名	課題番号
1	安藤 孟梓 他4名	人間文化 ・心 理	クライアントとの良好な関係性の形成に関するビデオフィードバックを用いた面接者トレーニング	PERG2023-101
2	佐藤 圭一 他1名	工 ・建 築	デザインプロセスを重視した建築製図・設計演習テキストの企画	PERG2023-102
3	金子 邦彦	工 ・情報工	チャットボットと DocsBot を活用したQAシステムの開発と授業利用への挑戦	PERG2023-103
4	佐藤 淳	生 命 工 ・生物工	福山大学キャンパスを生物多様性の学び舎とする	PERG2023-104
5	渡邊 正知	薬 学 部	ICTを活用した学修の推進	PERG2023-105
6	前田 吉広 他1名	大学教育 センター	未来創造館が掲げる“CROSSING※1”な学びを実現する、学生間相互学習支援システムの研究開発	PERG2023-106

- 学生の参加する社会連携活動助成

2. 学生の参加する社会連携活動助成金				
NO	研究者名 (代表者)	学科	課題名	課題番号
7	水上 雅晴	生命工 ・海洋生物	学生と市民が協力した身近な海洋環境の保全と啓発展示の実施	PERG2023-107
8	大杉 朱美	人間文化 ・心 理	サイバー防犯教室の対象拡大と広報啓発活動における発信力強化	PERG2023-108
9	濱本 有希 他2名	人間文化 ・心 理	地域安全マップ作製指導員のネットワーク構築の試み	PERG2023-109
10	赤澤 淳子 他2名	人間文化 ・心 理	こども遊び広場における運営の効率化と学生による広報活動の強化	PERG2023-110

発表はポスターの展示や映像を用いたものなど様々な形式でなされ、活発な討論や意見交換が行われた。参加者は 145 名と大変盛況であった。今回の FD・SD 研修が、各学科やセンターにおける今後の教育改善に反映されること、また新たなアイデアの萌芽となることが期待される。



2. 第2回FD・SD研修 「第11回福山大学教育改革シンポジウム」

令和6年9月5日（木）14：00～16：00に、1号館大講義室（01101）にて、通算11回目となる教育改革シンポジウムを開催した。第2回FD研修を兼ねるものであった。

今回のテーマは「大学生の主体性をどう育てるか？～高大接続の観点からアクティブラーニングの本質を問う～」であった。高等学校までの教育へ目を向けると、主体的・対話的で深い学びの実現が目指されており、その実現に向けた授業改善が求められている。いわゆるアクティブラーニングの視点からの授業改善である。

それは、ただ話し合ったり発表したりすることではないと言われ、「何を実現したいのか」がないといけない。また、子どもたちの頭の中が「アクティブ」に働いているかが問われているとも聞く。その目的は「アクティブラーニングを行うこと」ではなく、子どもたちを「アクティブ・ラナー」に育てることであるとも言う。では、いったい大学では、どう捉えればよいのだろうか。

今回は、こうした考え方や実践を聞いてアクティブラーニングの本質を探ることにした。アクティブラーニングを取り上げることでは、平成26年の第1回「大社連携（Community Engagement）の重要性」の中身や、平成29年の第4回「アクティブラーニングという教授法」の各テーマを継承し、発展させるものとなった。

当日、同テーマで基調講演をして下った広島県総務付課長の寺田拓真氏、並びに中等国語科教育及び教員養成の各実践経験から話題を提供してくれた井上泰准教授に、この場を借りて感謝を申し上げる。

（大学教育センター センター長 鶴田 泰人）

1. 概要

昨今、大学生の主体性をいかに育成するかが高等教育の重要な課題の一つとなっている。福山大学でも、学生が自ら考え行動する力を養うための教育改革が進められている。

令和6年度の、11回目となる教育改革シンポジウムは「大学生の主体性をどう育てるか？～高大接続の観点からアクティブラーニングの本質を問う～」をテーマとし、令和6年9月5日（木）14：00～16：00に、福山大学の1号館大講義室（01101）において開催された。2部構成とし、大学教育センターの教育開発部門の部門長である、薬学部の佐藤英治教授の司会で、以下のように進行した。

第Ⅰ部 基調講演（70分）

演　題：大学生の主体性をどう育てるか？～高大接続の観点からアクティブラーニングの本質を問う～

講　師：広島県総務局付課長 寺田拓真氏

休憩　（10分）

第Ⅱ部 鼎　談（40分）

話題提供：中等国語科教育及び教員養成における実践例や実践経験から考える

提 供 者：井上泰准教授

鼎 談 者：寺田拓真氏、今井航教授、井上泰准教授

第Ⅰ部では、文部科学省での勤務に次いで、現在は広島県総務局付課長である寺田氏による基調講演が行われた。氏は、参加者が考えたくなるような課題を設定し、またペアワークという手法を用いながら、アクティブラーニングの本質を巡って参加者に大いに考えさせてくれた。

氏は、学習形態のみをもって、アクティブラーニングであるのか否かの議論をすること自体が不適当であると説き、「活動」がアクティブであるか否かではなく、「思考」がアクティブであるか否かが重要であるということに気づかせてくれた。その上で、初等・中等教育の段階で進められている「主体的・対話的で深い学び」の紹介があり、「思考がアクティブな学び」こそ「深い学び」ではないか、と参加者に問いかけた。

また、そもそも「アクティブラーニングとは、いったい何のためのものか？」とも問い合わせ、その問いを通じて、児童生徒を「アクティブ・ラナー」に育てることの大切さと、そのために教師（大人）自身が「アクティブ・ラナー」になる必要性が強調された。

さらに、例えば「問い合わせる間が長い学習活動」である、複雑で深い学びのあり方を提示し、それを近年急速に進化を遂げる生成AIの得意な領域と比較しながら、思考することの大切さが説かれ、思考と主体性の関係への言及がなされた。

アクティブラーニングという手段を駆使した今回の講演は、参加者に強い印象を残し、アクティブラーニングの本質を掘り下げることで、育てたい学生の主体性が一体なにを指すのかが明確となり、そのための新たなアプローチへの興味・関心を喚起するものとなった。

10分の休憩を挟んで第Ⅱ部では、演者の寺田氏、大学教育センターの今井教授と井上准教授による鼎談が行われた。

はじめに、井上准教授より「高大接続」の具体事例として、中等国語科教育の実際（『竹取物語』学習）と、それを踏まえた大学での学びの実際（「国語科教育法」I・同II）が報告された。

多くの中等国語科教育においては、活動を行うことが主となり、古典作品と学習者が出会っていない可能性があること、一方で、教員が主体的に教材分析をして授業を行えば、学習者が作品の問い合わせと出会い、その答えをめぐって自己との対話をを行う可能性があることが説かれた。

また、中等国語科教育における古典との出会い損ないを念頭に置いて、大学の授業では出会い直しを図り、それを通して国語科教員としての主体性を育もうとしているとの説明があった。中等教

育においてどう主体性を育むか、そして中等国語科教員を養成する立場から大学での学びをどう生んでいくかが問われ、とくに「思考がアクティブな学び」を生むための諸条件が示された。

続いて、フロアとの対話へと展開し、教育の評価基準や教員の成長、アクティブラーニングの本質が議論となった。そこでは、教員自身が教科を楽しむことで生徒の学びを促す関係性が大切であるとの指摘があり、さらには、アクティブラーニングの本質は、「動機づけ」と学びの「転移」による深い学びにあるとも語られた。

大学教員自身が研究を楽しみ、自身の課題を追究していく姿勢が教育において重要なことを再認識することにもなった。

2. アンケートの結果

終了後、アンケートを実施した。今回のテーマとなった「大学生の主体性をどう育てるか？～高大接続の観点からアクティブラーニングの本質を問う～」への感想を求めたところ、193名の教員から回答が得られた。

先に、「学習形態のみをもって、アクティブラーニングであるのか否かの議論をすること自体が不適当で」あり、「活動」がアクティブであるか否かではなく、「思考」がアクティブであるか否かが重要であることに」その講演を通して気づかされたとしたが、こうした気づきを得たとする感想が、少なからず見られた。以下の通りで、そのまま引用する。

これまで考えていたアクティブラーニングとは、方法ばかりに気を取られており、学習する動機（自らすすんで学習する）などを高めることに焦点を当てられていなかった。

アクティブラーニングとは単に外的活動していれば良いというわけではなく、どれだけ深く考えて自分のものにしていくことにこそその本質があるということがよく分かりました。その意味ではたとえ講義形式でも集中してこちらの話を聞きながら、自分の考えと対話させつつ考えを深めることも、立派なアクティブラーニングといえるのではないでしょうか。

自己や身近なものに関連付けて考えることが結局のところアクティブラーニングということを今回の講演で知ることができたのは多いな収穫であった。

アクティブラーニングというものを再考する良いきっかけになりました。

その言葉の「活動的な」という意味合いばかりがいつの間にか先行し、内実である、主体的に行動できる力を育む学校教育という点がおろそかになっているかもしれない、ということに今回の講演で気づかされた。

確かに「活動」の部分ばかりに目が行きがちで、「思考がアクティブ」というところまでいかないのはその通りだと感じました。

活動がアクティブなのではなく、思考がアクティブであることという説明が印象に残っています。

アクティブラーニングと聞くと、グループワークのイメージが強かったのですが、どちらの学習方法も尊重し、バランスをとって進めていくものだと学び、これから指導意識を改める良いきっかけになりました。

こうした感想からは、今回「アクティブラーニングの本質を問う」のをテーマとしたことに一定の効果があったと考えられる。しかし、その本質へと接近することができたとは言え、では「どうやって、講義内で実践していくべきか、今後の課題だと思いました」といった感想があるように、その点で参加者の期待に十分に応えられなかつたことも指摘しておかなければならない。今後こうした実践的な内容へと掘り下げていくことへの期待は他にも、以下のように見られた。

今回の議論は、アクティブラーニングの具体的な実践についての議論には結局入ることが出来なかつたように思う。この次には、もう少し実践的な内容が話題になればよいのではないかと思つた。

アクティブラーニングがどのようなものはわかつたが、具体的にどうすればよいかはわからなかつた。また、大人数が受講する授業でのアクティブラーニングの実践方法を教えてほしい。

これに加えて「学習者に対してアクティブラーニングの効果を、行動的なアクティブ（質問した回数、チーム内で活発に発言しているなど）ではなくて、思考的なアクティブとして評価することの難しさを感じました」とあるように、その評価のあり方まで問おうとするものも散見された。

「結局のところ、学生をアクティブ・ラーナーとして育てるために大学においてどういう教育を行えばよいのか？という点についてはもやもやが残ったままである」ともやはりある一方で、その講演で強調された「教師（大人）自身が「アクティブ・ラーナー」になる必要性」に共感するものがあり次のように、それを挙げることができる。

学生も教員もアクティブ・ラーナーになることとの言葉が胸に響きました。

アクティブラーニングを学生に身に着けさせるには、教員自身がアクティブ・ラーナーたるねばならない、というご指摘は私自身の授業実戦の経験から言っても、その通りだと感じました。

アクティブ・ラーナーになることが肝要であるとのご講演には強く共感できるところです。

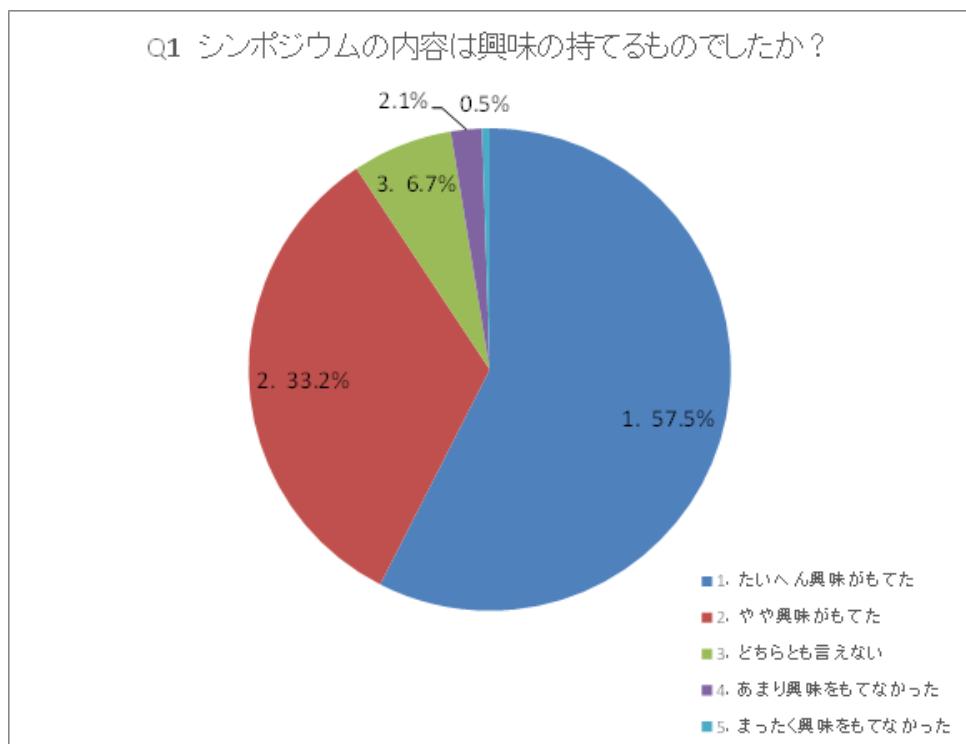
殊に大学教員は自らの研究の動機や目的、成果、目標を教育に活かすという点で、自ずとアクティブ・ラーナーであると思う。

アクティブ・ラーナーを育てるためには、教員自身がアクティブ・ラーナーにならなければならぬ、という話に深く同意しました。

究極的には大学の研究者がアクティブ・ラーナーであり続けることが肝要と考える。

今回特に印象に残ったのは、アクティブ・ラーナーを育てるには、先生自身がアクティブ・ラーナーになるべきだということです。

この点で言えば、戒めとして「研究を面白いと感じながら行っている教員がどれだけいるだろうか？教育のための教育になってはいないだろうか？そんなことを感じたシンポジウムだった」と述べるものもあった。大学教員自身の研究姿勢を自問する場にもなったようである。



同アンケートでは、ほかにも、今回のテーマへの興味の程度を問うた。193名の教員から回答が得られた。円グラフに見られるように「たいへん興味がもてた」「やや興味がもてた」を合わせれば、全体の90.7%が今回の内容に興味を持てるものであったとしている。

3. まとめ

現行の学習指導要領へ目を向けると、高等学校までの教育で「何を学ぶか」だけではなく「何ができるようになるか」が目指されており、そのために「どのように学ぶか」が重視され、「主体的な学び」になっているか、「対話的な学び」になっているか、「深い学び」になっているか、という視点から授業をよりよくすることが求められている。いわゆるアクティブラーニングの視点からの授業改善である。そうして「実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など」「学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性など」の資質・能力を育てようとしている。

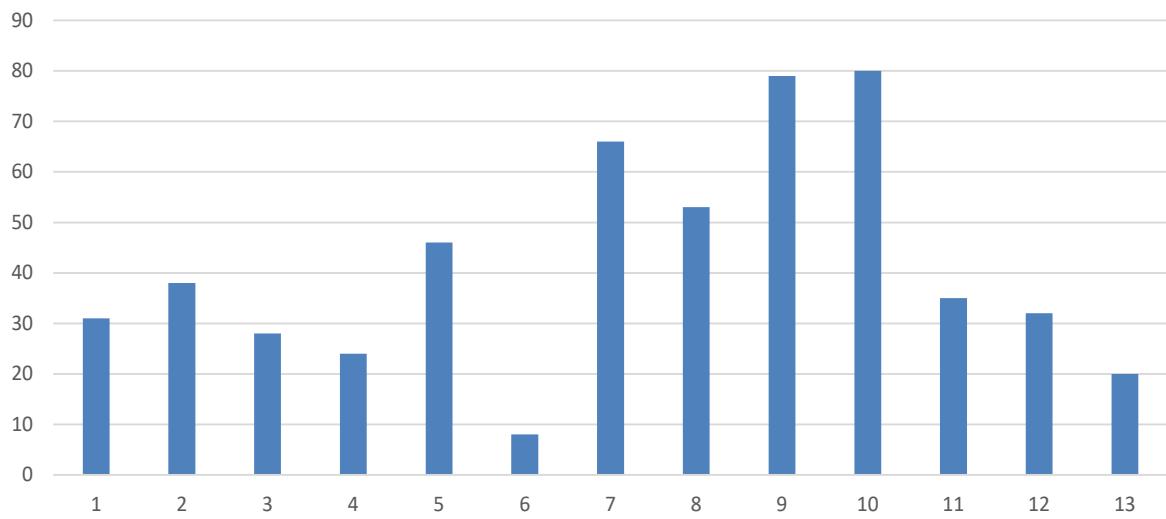
今回の教育改革シンポジウムでは、こうした高等学校までの学びの様子が変わりつつあることを理解して高大接続の観点から、大学生の学び／育ちのあり方を考えようとした。同時に、アクティブラーニングを問い合わせ直すことで、本学における教育方法や教育評価の更なる充実を目指そうとした。

アクティブラーニングの本質へと接近することができたと同時に、教師自身が「アクティブ・ラナー」にならなければならないことへの理解は深まったものの、メインテーマであった「大学生の主体性をどう育てるか？」への明確な解答は得られなかったと言える。とはいえ、それへの解答は、その本質へと接近することができた本学の各教員が自身の研究に基づき、創意工夫の見られる授業をつくり、その実践で試行錯誤を重ねる中で、得られていくはずである。同僚性を高めながら、大学生の主体性を育んでいきたい。

最後に、今後の教育改革シンポジウムの内容に関する希望調査の結果を付しておく。その希望を最多数から5位までを挙げれば、次の通りであった。

- 第1位 学生とのコミュニケーションの在り方 (回答数80)
- 第2位 学生の学びの様子 (回答数79)
- 第3位 教育方法・技術 (回答数66)
- 第4位 教育評価 (回答数53)
- 第5位 キャリア教育 (回答数46)

**Q3 今後の講演会・シンポジウムの内容について、
どのようなものがご希望ですか？**



Q3 今後の講演会・シンポジウムの内容について、どのようなものがご希望ですか？

- | | | |
|-------------------------------------|-----------|----------------------|
| 1. 初年次教育 | 2. 情報教育 | 3. 語学教育（日本語教育、外国語教育） |
| 4. 教養教育 | 5. キャリア教育 | 6. 自校教育（例えば、福山大学の歴史） |
| 7. 教育方法・技術 | 8. 教育評価 | |
| 9. 学生の学びの様子（例えば、関心・意欲・態度／学習時間／学修成果） | | |
| 10. 学生とのコミュニケーションの在り方 | 11. 高大接続 | 12. 大学間連携 |
| 13. その他（ ） | | |

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
31	38	28	24	46	8	66	53	79	80	35	32	20

(参考) 前回の教育改革シンポジウムにおける内容に関する希望調査の結果（令和5年9月14日）

- 第1位 学生とのコミュニケーションの在り方（回答数 55）
- 第2位 学生の学びの様子（回答数 53）
- 第3位 教育方法・技術（回答数 42）
- 第3位 教育評価（回答数 42）
- 第5位 高大接続（回答数 36）

(文責：教育開発部門長 佐藤英治・共通教育部門長 今井航)

3. 令和6年度福山大学学部・学科・センターのFD・SD活動報告

学部・学科・センターでは、各組織の専門性や特性に合わせて、以下表1のとおり FD・SD 活動が実施された。

表1 令和6年度 学部・学科・センターFD・SD研修実施調査表

		テーマ	FD or SD	実 施 回 数	実施場所	実施日時	講 師	参加 人 数	成 果
1	経済 学部	TA・SAの心 構えなど	FD	1	Zoom	令和6年4 月 17 日 12:30～ 13:00	早川達二 (国際経済 学科教授)	8名	教員3名、TA (M1 大学院生) 2 名、SA (3年生) 3 名
2	経済 学部	ゼミ選択のあ り方について	FD	1	01号館3 階	令和6年4 月 17 日 16:30～ 17:00	楠田昭二 (経済学部 長)	30名	3学科各ゼミのゼ ミ生人数のアンバ ランス、経済学科 と国際経済学科の 専門類似性などか ら一括ゼミ選択に ついて検討
3	経済 学部	第1回・経済 学研究会「パ ンデミックを めぐって 一 明代中国のペ スト流行との 対比 一」	FD	1	Zoom	令和6年6 月 20 日 12:30～ 13:00	有賀敏之 (国際経済 学科教授)	17名	明代中国のペスト 流行との対比につ いての研究内容を 発表し、質疑を行 った。

4	経済学部	第2回・経済学研究会 「How Does the Plant Level Fragmentation in Sewage Treatment Influence Municipal Level Economies of Scale? (Joint with David Saal, Takuya Urakami, and Pablo Arocena)」	FD	1	Zoom	令和6年7月26日 12:30～13:00	北村友宏 (経済学科講師)	13名	廃水処理施設の効率、規模の経済の影響についての研究内容を発表し、質疑を行った。
5	経済学部	入試制度(試験科目のあり方)	FD	2	01号館3階 Zoom	令和6年7月26日 12:30～13:01 令和6年9月25日 14:30～16:00	楠田昭二 (経済学部長) 田中征史 (経済学科講師)	30名 17名	入学後の成績分布を踏まえ、試験科目のあり方について検討協議した。方式1(英語・数学IA)の導入を検討することとなった。
6	経済学部	第3回・経済学研究会「景気予測にどうAIを組み込むか」	FD	1	社会連携センター	令和6年10月11日 18:00～19:00	山澤成康 (跡見学園女子大学マネジメント学部教授)	6名	景気予測にどうAIを組み込むかについての研究内容を発表し、質疑を行った。

7	経済学部	第4回・経済学研究会「備後地域中小企業の事業承継をめぐる「個人のれん」の適正評価推計にむけた調査研究の構想」	FD	1	Zoom	令和6年12月12日 12:30~ 13:00	飯田哲也 (税務会計学科教授) 高山和夫 (国際経済学科准教授)	11名	備後地域中小企業の事業承継をめぐる「個人のれん」の適正評価推計にむけた調査研究についての研究内容を発表し、質疑を行った。
8	経済学部・経済学研究科	2024(令和6)年度大学院の教育・研究等に関するアンケート結果	FD	1	Zoom	令和7年2月19日 12:30~ 13:00	野村宗訓 (経済学科教授) 早川達二 (国際経済学科教授)	10名程度	アンケート結果報告と課題等の検討
9	経済学部	第5回・経済学研究会「知的障害者(児)柔道研究について」	FD	1	Zoom	令和7年2月25日 12:30~ 13:00	中村和裕 (経済学科准教授)	10名程度	知的障害者(児)柔道についての研究内容を発表し、質疑を行った。
10	人間文化学科	学生に関する情報交換・カンファレンスについて	FD	13	1号館4階資料室	毎回の学科会議内	重迫隆司、柳川真由美 (人間文化学科教授)	教員全9名(欠席者を除く)	課題のある学生と成果の上がった学生に関する情報共有を行うとともに、今後の指導方針や指導方法についての意見交換を行った。
11	心理学科	1,2年生の心情把握等について	FD	1	29号館3階多目的室	令和6年10月16日 16:15~ 17:00	進行:中島学(学科長)	教員14名(助手2名を含む)	個別に起きている学生の対応について3グループに分かれて話し合い、意見交換をし学生のニーズの把握と個別的な対応・指

									導に関しての知見を深めた。
12	心理学科	シラバス作成と相互チェックについて	FD	1	29号館 3階多目的室	令和7年1月22日 16:00~16:40	進行: 中島学(学科長)	教員14名(助手2名を含む)	シラバス内容の標準化を図るためのチェックポイントや、講義内容の工夫等に関して具体的な対応策等に関して知見が深められた。
13	メディア・映像学科	シラバス点検を兼ねたFD	FD	1	オンライン	令和6年12月18日	内垣戸貴之(メディア・映像学科准教授)	教員8名	シラバスを点検しつつ、学科の教育目標を確認し、各教員の授業における中項目との対応状況を共有できた。
14	電気電子工学科	今後の電気系教育について	FD	1	234号館 2階 02205会議室	令和6年8月23日 16:30~17:30	香川直己(電気電子工学科長)	教員10名(助手1名含む)	8月22日にオンラインで実施された、第75回大学電気系教員協議会の内容を展開し、意見交換を行った。
15	電気電子工学科	合理的配慮について	FD	1	234号館 2階 02205会議室	令和7年2月6日 16:30~17:55	香川直己(電気電子工学科長)	教員10名(助手1名含む)	合理的配慮が必要である場合の対応について討議した。

16	電気 電子 工学 科	中国地域の半 導体産業の動 向について	FD	1	234号館 2階 02205会 議室	令和7年3 月10日 10:00～ 11:30	香川直己 (電気電子 工学科長)	教員 10 名 (助 手1 名含 む)	3月4日にオンラ インで実施された 中国地域半導体関 連振興協議会第6 回会合の内容を展 開し、意見交換を行 った。
17	電気 電子 工学 科	授業評価アン ケート結果を ふりかえる	FD	1	234号館 2階 02205会 議室	令和7年3 月10日 10:00～ 11:30	香川直己 (電気電子 工学科長)	教員 10 名 (助 手1 名含 む)	令和6年度の授業 評価アンケート結 果およびフィード バック報告書の集 約結果を開示し、 意見交換を行っ た。
18	電気 電子 工学 科	定員確保のた めに	SD	1	234号館 2階 02205会 議室	毎週木曜日	香川直己 (電気電子 工学科長)	教員 10 名 (助 手1 名含 む)	毎週木曜日の学科 会議内で、定員確 保にむけた他大学 の取組や社会情勢 に関する話題に基 づいた意見交換を 行っている。（継 続中）
19	建築 学科	今後の障害学 生支援	FD	1	Zoom	令和7年2 月25日 11:30～ 12:10	都祭弘幸 (建築学 科)	教員 10 名	次年度スタートの 新しい障害学生支 援制度を確認する とともに、隠れた 障害学生の事例紹 介、今後の対応に ついて議論し方向 性を検討・共有し た。
20	情報 工学 科	情報工学科IR	FD	1	04201	令和6年6 月5日 16:00～ 17:00	金子邦彦 (工学部教 授)	教員 10 名	情報工学科カリキ ュラムの点検と改 善計画の検討。社 会人リスクリング の検討。

21	情報工学科	情報工学科 IR	FD	1	04201	令和7年3月実施予定	尾関孝史 (工学部教授)		学生の入学時の状況、GPA、資格取得等の客観データを用いて分析、検証、今後の学生指導等の考察を得る
22	機械システム工学科	入学者増に向けて	FD SD	1	32号館	令和6年4月10日 10:50~ 12:20	加藤昌彦 (工学部教授)	教職員 10名	本学科及び競合校の入学者数推移の分析結果について検討することにより、本学科の現状について意見を交わすし共通の問題認識を持つことができた。
23	機械システム工学科	新入生アンケート結果の分析	FD SD	1	32号館	令和6年5月7日 10:50~ 12:20	中村格芳 (工学部准教授)	教職員 10名	新入生対象に実施した本学科への入学動機、他大学との併願状況等のアンケートを分析し、次年度入学者増加のための活動の指針について、有意義な意見を交わすことができた。
24	機械システム工学科	高校訪問振り返り	FD SD	1	オンライン	令和6年11月5~8日	加藤昌彦 (工学部教授)	教職員 10名	海洋機械コース新設に伴い、新たに作製したパンフレットを持参して高校訪問した結果を情報交換するとともに、状況の分析を行った。

25	生命工学部	野外調査（学外指導）における安全対策	SD	1	17号館2階1721教室	令和7年3月10日 10:40～11:10	阪本憲司（生命工学部 海洋生物科学科教授）	教員37名（助手8名含む） 事務職員1名	卒業研究等で学生を引率して学外で調査等を行う際の準備の手順や注意点を、学部全教員が共有した。
26	生物科学科	近隣地域における生物・バイオ系高等教育機関の状況分析	SD	1	17号館1階講究室	令和7年1月27日 15:30～16:20	岩本博行（生物科学科教授）	教員10名（助手1名含む）	近隣地域の大学における生物・バイオ系高等教育機関の現状を認識し、本学科と比較した。
27	健康栄養科学科	第39回管理栄養士国家試験の分析	SD	1	18号館2階18201教室	令和7年3月17日 15:00～16:30	菊田安至（生命工学部 健康栄養科学科教授）	教員7名（助手3名含む）	3月2日に行われた第39回管理栄養士国家試験の出題傾向と結果について議論し、次年度以降の指導方針を共有した。
28	海洋生物科学科	多様化する学生への対応	SD	1	16号館1階図書・セミナー室	令和6年12月12日 17:30～18:00	北口博隆（海洋生物科学科教授）	教員14名	処分を受けた学生と被害者への対応、情報共有
29	海洋生物科学科	障害のある学生に対する支援について	SD	1	16号館1階図書・セミナー室	令和6年12月12日 18:00～18:30	北口博隆（海洋生物科学科教授）	教員14名	障害のある学生に対する合理的配慮についての意見交換

30	薬学科	新コアカリキュラムによる薬学教育の変化～国家試験への対応～	FD	1	未来創造館3階 110301室	令和6年12月27日 13:00～14:30	木暮 喜久子氏、田渕智光氏(薬学ゼミナール)	教員37名(助手7名含む)	本年度から始まった薬学教育モデル・コア・カリキュラムによる今後の薬剤師教育の在り方、薬剤師国家試験の動向について薬剤師予備校の観点からの講演を聞き、知見を深めた。
31	大学教育センター	第1回授業研究「日本語表現法Ⅰ」	FD	1	01209教室	令和6年6月25日 10:50～12:20	井上 泰(大学教育センター准教授)	教員7名(助手1名含む)	授業を観察した。
32	大学教育センター	第1回授業研究批評会	FD	1	01322教室	令和6年6月28日 12:15～13:00		教員13名(助手1名含む)	授業公開した授業について、その内容・方法に関する意見を交換した。
33	大学教育センター	第2回授業研究「地誌」	FD	1	2011講義室	令和6年10月22日 13:10～14:40	両角遼平(人間文化学科講師)	教員9名(助手1名含む)	授業を観察した。

34	大学 教育 セン ター	第2回授業研 究批評会	FD	1	01322 教 室	令和6年10 月25日 12:15～ 13:00		教員 14 名 (助 手1 名含 む)	授業公開した授業 について、その内 容・方法に関する 意見を交換した。
35	大学 教育 セン ター	第3回授業研 究「韓国語 II」	FD	1	01103 講 義室	令和6年12 月12日 13:10～ 14:40	崔 嶠汀 (経済学科 助教)	教員 10 名 (助 手1 名含 む)	授業を観察した。
36	大学 教育 セン ター	第3回授業研 究批評会	FD	1	01322 教 室	令和6年12 月13日 2:15～13:00		教員 11 名 (助 手1 名含 む)	授業公開した授業 について、その内 容・方法に関する 意見を交換した。

4. 総括

令和2年度のCOVID-19の感染拡大により、FD・SD活動は状況に応じて多様な方式で実施されるようになったものの、令和5年5月にCOVID-19が5類感染症に移行したのに伴い、令和6年度にはほぼすべての活動が対面方式で行われた。一方で、研修会に直接参加できない教職員に配慮して、リモート参加やオンデマンド視聴などのオンライン方式が残された。学部・学科・センターのFD・SD活動は、表1に記載のとおり多様なテーマのもと開催された。

本年で第11回を迎えた教育改革シンポジウムでは、平成29年の第4回でもテーマとした「アクティブラーニング」を改めて取り上げた。福山大学でも広く行われている「アクティブラーニング」を問い合わせことで、本学における教育活動の更なる充実を目指した。本研修のアンケートでは、「アクティブラーニング」の推進における課題について様々な意見をいただいた。今後の本学における教育の改善に役立てたい。